

理解度&釣れる度100%

丸

マルキュー

優良 餌本



パワーエサ バッグ



バッグに
一冊入れて
おこう!



The target period 6月~11月

Contents

- 02 Pickup! New item!! 「防玉ハード (L)」
- 04 両ダンゴの浅ダナ釣り
- 03 両ダンゴのチョーチン釣り
- 12 「ヒゲトロ」セットの浅ダナ釣り
- 13 「ヒゲトロ」セットのチョーチン釣り
- 20 ウドンセットの浅ダナ釣り
- 24 ウドンセットのチョーチン釣り
- 23 両ダンゴの底釣り
- 34 活用してみよう! 「へらエサブレンド計算ツール」

夏秋号 2023

HERA BAIT POWER BOOK

Pickup! New item!!

「カ玉ハード(L)」

絞り出しうどんサイズで汎用性アップ



円柱の形状によりユラユラとアピールしながら落下する。

ビンから取り出して、そのまま使える粒状くわせエサ「カ玉ハード」シリーズは、そのエサ持ちのよさが好評を博している。



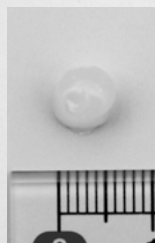
ビンから取り出して、そのまま使える粒状くわせエサとして重宝する「カ玉ハード」シリーズ。定評あるエサ持ちのよい素材はそのままに、「カ玉ハードⅡ」より大きく、「カ玉ハードⅢビッグ」より小さい、一般的な絞り出しうどんに近いサイズに仕上がっているのが「カ玉ハード（L）」です。

盛期のうどんセットでは「カ玉ハードⅡ」では小さい、物足りない、かといってホタチョーでないかぎり「カ玉ハードⅢビッグ」は大きすぎるというユーザーの要望に応える形で誕生しました。

また、一般的な絞り出しうどんのサイズに近づけたことで、盛期のうどんセットのくわせエサだけでなく、段差の底釣りや冬場の沖宙セットなど、使える幅が広がりました。

「カ玉ハード」シリーズの最大の強みはそのエサ持ちのよさ。盛期のへら鮎の強烈なアオリにも負けず、またジャミが多い釣り場でもそのエサ持ちを発揮し食いアタリにつなげてくれます。時代のニーズにあった「カ玉ハード（L）」がこれからはくわせエサの定番になっていくでしょう。

「カ玉ハード（L）」は一般的な絞り出しうどんに合わせて約6mm径、長さは約8mmの汎用性が高いサイズとなっている。



「カ玉ハードⅡ」

「カ玉ハード(L)」

「カ玉ハードⅢビッグ」

※ 2022年に生産終了しております。



盛期に数を釣る定番釣法

両ダンゴの浅ダナ釣り

釣り方の基本

両ダンゴの浅ダナ釣りは、盛期のへら鮒釣りにおいて、一番数が釣れる釣り方です。テンポよくエサ打ちを繰り返すスピーディーな釣りにより多くのへら鮒を釣りあげるのが面白いです。

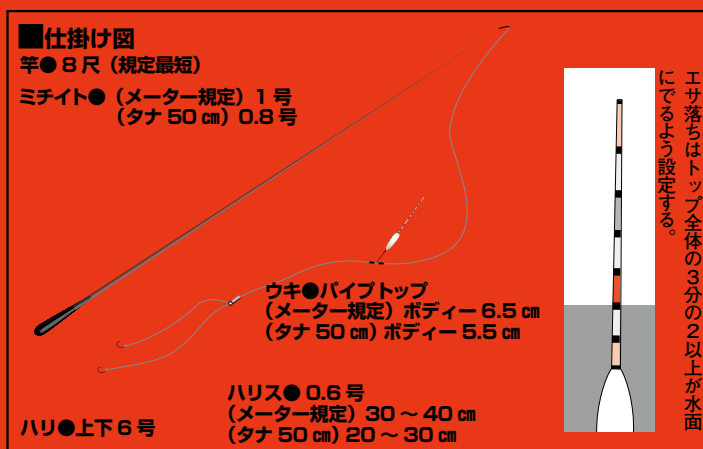
この釣り方において一番重要なのはエサを持たせることです。高活性時のへら鮒はエサに対して強烈にアタックしてきます。このへら鮒のアオリにエサが負けてしまえば、いくらウキが動いてもなかなか食わせることができません。

「エサは持たせているよ」というかもしれませんが、実は肝心のタイミングでエサが抜けてしまっていることが多いもの。強いサワリがでて、いかにもアタリそうなところでアタらないのは、まさにその典型です。

この釣りではとにかくエサを持たせることに徹底して釣りを組み立てることが重要になります。

タックルセッティング

仕掛けは基本的に強い方向でセッティングしてください。弱いセッティングではエサを持たせることが難しくなり、釣りそのものが組み立てられません。特にウキは大きめのものを選びましょう。



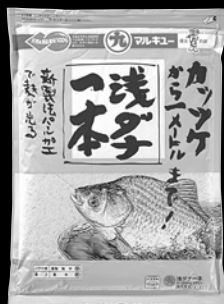
軽さで好反応！エサ持ちちに自信アリ！！

●エサブレンド

「カクシン」500 cc+
「浅ダナー本」100 cc+
「コウテン」100 cc+
水 200 cc



+



+



+



●作り方と打ち始め

「カクシン」500 cc、「浅ダナー本」100 cc、「コウテン」100 ccをエサボウルに入れて軽く混ぜ合わせたところに水 200 ccを注ぐ。ムラがないように大きく 20～30 回かき混ぜ、エサがまとまりだしたら基エサの完成。これを 1/3 に小分けして 10 回ほど押し練りをし、エア抜いて使い始める。これでウキが沈没するぐらいエサが持てば OK。持たないようならさらに押し練りで調整する。

エサの大きさとハリ

実寸大



推奨ハリサイズ=6号

●タナを浅くする

タナの規定がない釣り場に限定されますが、タナを浅くすれば落下中のエサへのへら鮎のアタックが減りますのでその分エサが持つようになります。ですから、タナ規定がない釣り場でエサが持たないときは、シンプルにタナを浅くしてみましょう。

●ハリスを詰める

ハリスを詰めると落下中のアピールが減り、へら鮎のアタックが減るのでエサが持つようになります。先に触れたタナを浅くするのと同じような効果が得られます。特にウキが立ってからなかなかエサがナジまないような場面で試したい対応です。メーター規定ではスタート時のハリス長が30cmと40cmなので、まずは5cmずつ詰めてみましょう。それでもエサが持たないようならさらに5cmずつ詰めてみましょう。また、ハリスを詰めることでサワリやアタリがでなくなったら、ハリスの長さは元に戻してください。

●手水は慎重に……

エサをやわらかくするために手水をすることもあるでしょう。手水と押し練りで調整という表現もありますが、まずはエサを持たせることが優先ですので、押し練りのみで調整します。硬くて持つエサで釣ればそれで問題ありません。強いアタリがでて空振るようならハリスを詰め、それでもカラツンが解消できないとき、濡らした手で押し練りをし少しだけエサのタッチをやわらかくします。やわらかいエサはエサ持ちが悪くなりますし、エサ付けも難しくなりますので、注意が必要です。

●上手く釣れないときは……

エサをしっかり持たせているのに思うように釣れない場合は、混雑や天候などで食い渋りの可能性もあります。こういうときは両ダンゴにこだわることなく、ヒゲセット（12ページ）やウドンセット（20ページ）など、釣り方を変更しましょう。

両ダンゴの浅ダナ釣り

エサを持たせるテクニック

●エサを調整する

元々ネバる素材をブレンドしてエサ持ちのよいエサに仕上げますが、作ったエサをそのまま使うのではなく、打ち始めから押し練りを加え、しっかりエサが持つ状態でスタートしてください。目安としては、ウキのトップ先端ギリギリまでナジむぐらいのエサ持ち加減です。次第に魚が寄ってきますと、徐々にエサ持ちが悪くなります。こういうときは、さらに押し練りを加えてエサが必ず持つように調整します。



写真右側がエサをかき混ぜただけの状態（基エサ）。左上が押し練りを加えた状態。エアーを抜くことでエサが丸めやすくエサが持つようになる。打ち始めから押し練りを加えた状態から使い始めること。

押し練り

手の甲側を使ってエサを押しエアーを抜くのが“押し練り”。エアーを抜くことでエサがまとまりエサ持ちがよくなる。この“押し練り”を繰り返してエサが持つようにする。



ダイナミックな釣りが楽しめる

両ダンゴの チョーチン釣り

釣り方の基本

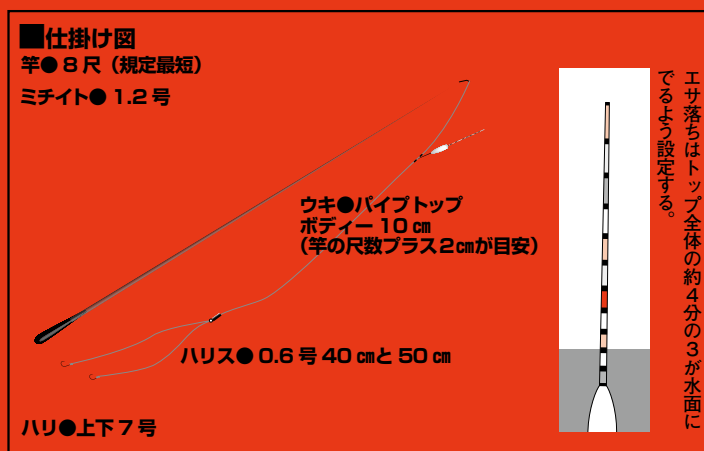
両ダンゴのチョーチン釣りは、豪快なアタリと深場からへら鮎を引き抜くダイナミックさが面白い、盛期ならではの釣り方です。

この釣り方において一番重要なのは、浅ダナ同様エサを持たせることです。浅ダナより狙うタナが深い分、よりしっかりとエサを持たせなければなりません。タナまで確実にエサを持たせることがへら鮎を厚く寄せることにつながり、それぞれ時合ができれば毎回のよう強いアタリで釣れ続きます。そのためにもエサを持たせることを強く意識してください。

またオモリを十分に背負う大きなウキを使うことも重要なポイントです。へら鮎の活性が高くなる時季に小さいウキではエサを確実にタナまで届けることができません。エサがタナまで届かなければ釣りになりませんので、大きいウキを使うことが大前提です。

タックルセッティング

仕掛けは基本的に強い方向でセッティングしてください。弱いセッティングではエサを持たせることが難しくなり、釣りそのものが組み立てられません。特にウキは大きめのものを選びましょう。



しっかりタナまで持つ強いブレンド!!

●バラケブレンド

「カクシン」500 cc+
「バラケマツハ」100 cc+
「ダンゴの底釣り夏」100 cc+
水 200 cc



+



+



+



●作り方と打ち始め

「カクシン」500 cc、「バラケマツハ」100 cc、「ダンゴの底釣り夏」100 ccをエサボウルに入れて軽く混ぜ合わせたところに水 200 ccを注ぐ。ムラがないように大きく 20～30 回かき混ぜ、エサがまとまりだしたら基エサの完成。これを 1/3 に小分けして 10 回ほど押し練りをし、エア抜いて使い始める。これでウキが沈没するぐらいエサが持てば OK。持たないようならさらに押し練りで調整する。

エサの大きさとハリ

実寸大



推奨ハリサイズ=7号

●エサを大きく付ける

狙いのタナまでエサが届かなければこの釣りは成立しません。ウキが沈没するぐらいしっかりとナジミ幅をだして釣ることを意識しましょう。もう少しエサを持たせたいと思ったら単純にエサを大きく付けてみましょう。ハリに残るエサ量が増えれば、それだけナジミ幅も多くなります。

●ハリスを詰める

ハリスを詰めると落下中のアピールが減り、へら鮎の ATTACK が減るのでエサが持つようになります。ウキが立ってからなかなかエサがナジまないような場面や空振りやスレアタリが多いときに試したい対応です。スタート時のハリス長が 40 cm と 50 cm なので、まずは 5 cm ずつ詰めてみましょう。これでもエサが持たないようならさらに 5 cm ずつ詰めてみましょう。また、ハリスを詰めることでサワリやアタリがでなくなったら、ハリスの長さは元に戻してください。

●手水は慎重に……

エサをやわらかくするために手水をすることもあるでしょう。手水と押し練りで調整という表現もありますが、まずはエサを持たせることが優先ですので、押し練りのみで調整します。硬くて持つエサで釣ればそれで問題ありません。強いアタリがでて空振るようならハリスを詰め、それでもカラツンが解消できないとき、濡らした手で押し練りをし少しだけエサのタッチをやわらかくします。やわらかいエサはエサ持ちが悪くなりますし、エサ付けも難しくなりますので、注意が必要です。

●上手く釣れないときは……

エサをしっかり持たせているのに思うように釣れない場合は、混雑や天候などで食い渋りの可能性もあります。こういうときは両ダンゴにこだわることなく、ヒゲセット（16 ページ）やウドンセット（24 ページ）など、釣り方を変更しましょう。

両ダンゴのチョーチン釣り

エサを持たせるテクニック

●エサを調整する

元々ネバる素材をブレンドしてエサ持ちのよいエサに仕上げますが、作ったエサをそのまま使うのではなく、打ち始めから押し練りを加え、しっかりエサが持つ状態でスタートしてください。目安としては、ウキのトップ先端ギリギリまでナジむぐらいのエサ持ち加減です。次第に魚が寄ってきますと、徐々にエサ持ちが悪くなります。こういうときは、さらに押し練りを加えてエサが必ず持つように調整します。



写真右側がエサをかき混ぜただけの状態（基エサ）。左上が押し練りを加えた状態。エアーを抜くことでエサが丸めやすくエサが持つようになる。打ち始めから押し練りを加えた状態から使い始めること。

押し練り

手の甲側を使ってエサを押しエアーを抜くのが“押し練り”。エアーを抜くことでエサがまとまりエサ持ちがよくなる。この“押し練り”を繰り返してエサが持つようにする。



両ダンゴで釣れそうで釣れないときが出番

「ヒゲトロ」セットの 浅ダナ釣り

釣り方の基本

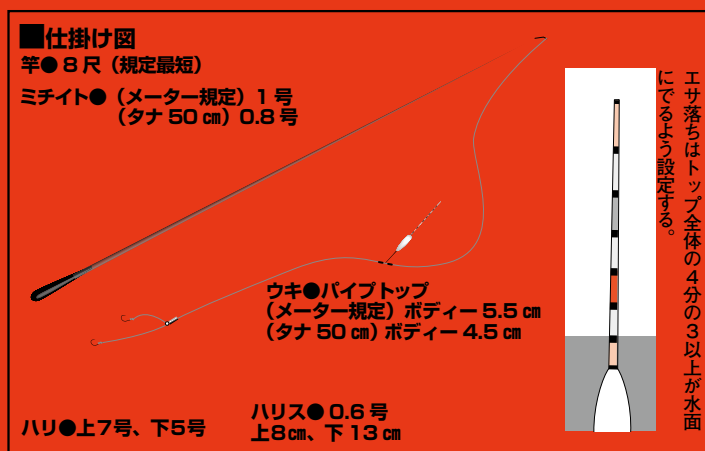
「ヒゲトロ」セットの浅ダナ釣りは、両ダンゴで釣れそうでなかなか釣れないときに有効な釣り方です。ダンゴエサに興味は示している（サワリはある）が、混雑によるプレッシャーや食いがイマイチで、ダンゴエサそのものを食わないとき、ウキの動きでいけばサワリがあるのに食いアタリがでにくいときがこの釣り方の出番です。

この釣りは、バラケエサに近づいてきたへら鮒がくわせエサの「ヒゲトロ」を食う仕組み。セット釣りとはいってもある程度バラケエサに近づける意識が必要で、場合によっては食いアタリの半分近くがダンゴエサを食ってきても問題ありません。

そのためには、バラケエサをタナまで持たせることが大前提となります。ウドンセットのように開くバラケで寄せるのではなく、しっかりバラケをナジませてから釣りを組み立ててください。

タックルセッティング

仕掛けは基本的に強い方向でセッティングしてください。釣れないときに迷いを捨てるためにもセッティングは固定しましょう。



適度なまとまりとバラケ性で使いやすい

●バラケブレンド

「コウテン」300 cc+
「バラケマツハ」100 cc+
水 100 cc



+



+



●作り方と打ち始め

「コウテン」300 cc、「バラケマツハ」100 ccをエサボウルに入れて軽く混ぜ合わせたところに水100 ccを注ぐ。ムラがないように大きく20～30回かき混ぜ、エサがまとまりだしたら基エサの完成。これを1/3に小分けして10回ほど押し練りをし、エア抜いて使い始める。これでウキが沈没するぐらいエサが持てばOK。持たないようならさらに押し練りで調整する。

エサの大きさとハリ

実寸大



推奨ハリサイズ=7号

●エサを調整する

作ったエサをそのまま使うのではなく、打ち始めから押し練りを加え、しっかりエサが持つ状態でスタートしてください。目安としては、ウキのトップ先端ギリギリまでナジむぐらいのエサ持ち加減です。次第に魚が寄ってきますと、徐々にエサ持ちが悪くなります。こういうときは、さらに押し練りを加えてエサが必ず持つように調整します。

押し練り

手の甲側を使ってエサを押しエアを抜くのが“押し練り”。エアを抜くことでエサがまとまりエサ持ちがよくなる。この“押し練り”を繰り返してエサが持つようにする。



●タナを浅くする

タナの規定がない釣り場に限定されますが、タナを浅くすれば落下中のエサへのへら鮎のアタックが減りますのでその分エサが持つようになります。ですから、タナ規定がない釣り場でエサが持たないときは、シンプルにタナを浅くしてみましょう。

●上手く釣れないときは……

エサをしっかりと持たせているのに思うように釣れない場合は、混雑や天候などで食い渋りの可能性もあります。こういうときは状況が渋いと判断してウドンセット（20ページ）に釣り方を変更しましょう。

「ヒゲトロ」 セットの浅ダナ釣り

基本必須テクニック

「ヒゲトロ」の使い方

「ヒゲトロ」は盛期のセット釣りに最適なくわせ用トロロエサ。使用方法は水に浸してハリに引っ掛けるだけで、良質な繊維がしっかりとハリがかりしてエサ持ち抜群。チャック袋を採用しているので、開封後でも品質が安定。1度の釣行で使いきれなくても次回もそのまま使用できる。●内容量 18g

「ヒゲトロ」は品質をキープできるチャック袋を採用。



①袋からトロロを取り出す。長くて強い良質な繊維が特徴。



②使う分だけちぎって取り出す。残りはチャック袋に仕舞っておく。



③長い繊維は細かくちぎる。



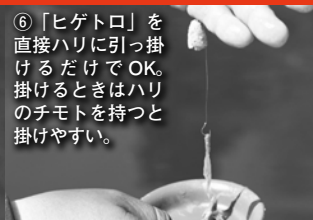
④ちぎった「ヒゲトロ」を手に乗せて水に浸す。



⑤軽く水を絞って小皿などに移す。



⑥「ヒゲトロ」を直接ハリに引っ掛けるだけでOK。掛けるときはハリの手モトを持つと掛けやすい。



両ダンゴで釣り切れなときが出番

「ヒゲトロ」セットの チョーチン釣り

釣り方の基本

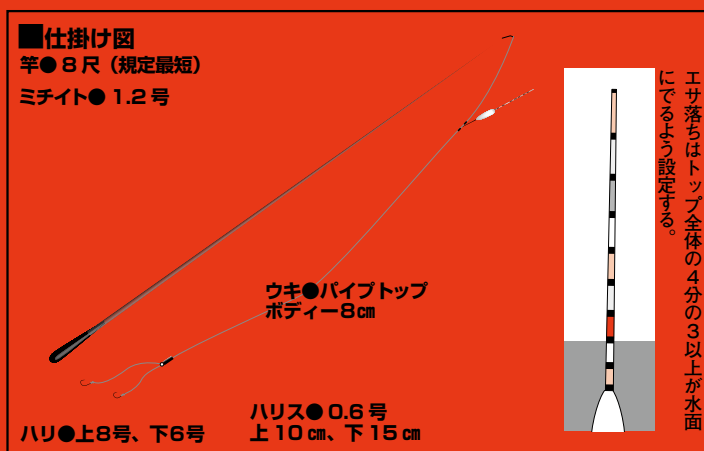
「ヒゲトロ」セットのチョーチン釣りは、浅ダナ釣りと同様に両ダンゴで釣れそうでなかなか釣り切れなとき有効な釣り方です。また、チョーチン釣りは一定のポイントにエサを入れやすいので、強固な時合で大釣りも可能です。

ダンゴエサに興味は示している（サワリはある）が、ダンゴエサそのものを食わないとき、ウキの動きでいえばサワリがあるのに食いアタリが少ないときこそこの釣り方の出番です。

バラケエサに近づいてきたへら鮒が近くにあるくわせエサの「ヒゲトロ」を食う仕組みなので、しっかりエサをタナまで持たせることが求められます。それにはしっかり持たせられるエサブレンドであること、適量のオモリを背負うウキを使うことがポイントとなります。

タックルセッティング

仕掛けは基本的に強い方向でセッティングしてください。釣れないときに迷いを捨てるためにもセッティングは固定しましょう。



浅ダナブレンドを硬さで持たせる

●バラケブレンド

「コウテン」300 cc+
「バラケマツハ」150 cc+
水 100 cc



+



+



●作り方と打ち始め

浅ダナのブレンドを硬さでアレンジ。「コウテン」300 cc、「バラケマツハ」150 ccをエサボウルに入れて軽く混ぜ合わせたとこに水 100 ccを注ぐ。ムラがないように大きく 20～30 回かき混ぜ、エサがまとまりだしたら基エサの完成。これを 1/3 に小分けして 10 回ほど押し練りをし、エア抜いて使い始める。これでウキが沈没するぐらいエサが持てば OK。持たないようならさらに押し練りで調整する。

エサの大きさとハリ

実寸大



推奨ハリサイズ=8号

●エサを調整する

作ったエサをそのまま使うのではなく、打ち始めから押し練りを加え、しっかりエサが持つ状態でスタートしてください。目安としては、ウキのトップ先端ギリギリまでナジむぐらいのエサ持ち加減です。次第に魚が寄ってきますと、徐々にエサ持ちが悪くなります。こういうときは、さらに押し練りを加えてエサが必ず持つように調整します。

押し練り

手の甲側を使ってエサを押しエアを抜くのが“押し練り”。エアを抜くことでエサがまとまりエサ持ちがよくなる。この“押し練り”を繰り返してエサが持つようにする。



●縦誘いを駆使する

しっかりバラケエサを持たせることが大切ですが、極端に持ちすぎた場合は、竿先を持ち上げるように縦誘いを入れてみましょう。これでバラケ性が促進されへら鮎に興味を惹かせることができます。ただし、縦誘いでバラケエサが抜けては意味がないので注意してください。

●上手く釣れないときは……

エサをしっかり持たせているのに思うように釣れない場合は、混雑や天候などで食い渋りの可能性もあります。こういうときは状況が渋いと判断してウドンセット（24 ページ）に釣り方を変更しましょう。

「ヒゲトロ」 セットのチョーチン釣り 基本必須テクニック

「ヒゲトロ」の使い方

「ヒゲトロ」は盛期のセット釣りに最適なくわせ用トロロエサ。使用方法は水に浸してハリに引っ掛けるだけで、良質な繊維がしっかりとハリがかりしてエサ持ち抜群。チャック袋を採用しているので、開封後でも品質が安定。1度の釣行で使いきれなくても次回もそのまま使用できる。●内容量 18g

「ヒゲトロ」は品質をキープできるチャック袋を採用。



①袋からトロロを取り出す。長くて強い良質な繊維が特徴。



②使う分だけちぎって取り出す。残りはチャック袋に仕舞っておく。



③長い繊維は細かくちぎる。



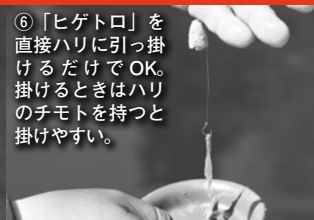
④ちぎった「ヒゲトロ」を手に乗せて水に浸す。



⑤軽く水を絞って小皿などに移す。



⑥「ヒゲトロ」を直接ハリに引っ掛けるだけでOK。掛けるときはハリの手モトを持つと掛けやすい。



盛期の食い渋り対策

ウドンセットの 浅ダナ釣り

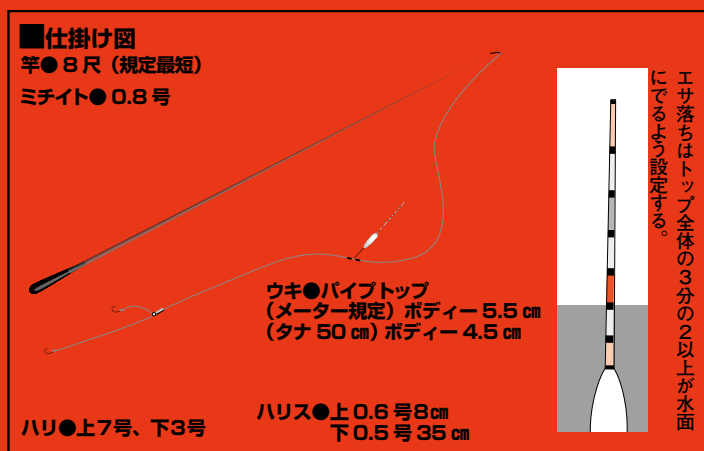
釣り方の基本

魚の活性が高い盛期であっても何かしらの理由で食い渋ることがあります。両ダンゴや「ヒゲトロ」セットでサワリやアタリがほぼでないようなときは、ウドンセットを試してみましょう。

冬に行なう一般的なウドンセットは開くエサをブレンドの軸とし、寄せることに主眼を置きますが、暖季のセットはそこまで寄せを意識しません。エサを開かすのではなく持たせる方向で釣りを組み立てます。持たせたバラケエサに近づくへら鮒をウドンで食わせる。つまり、「ヒゲトロ」セットと同じような考え方で、少しだけ距離をとった（下ハリスが長い）セッティングで寄りの悪い状況でもアタリを増やしていくのです。極端にエサが開いてしまうと、そのバラけたエサを追ってへら鮒は遠巻きになりますので注意が必要です。

タックルセッティング

仕掛けは基本的に強い方向でセッティングしてください。釣れないときに迷いを捨てるためにもセッティングは固定しましょう。



軽さとまとまりでへら鮎を近づける

●バラケブレンド

「カクシン」200 cc+

「バラケマツハ」200 cc+

「粒戦」25 cc+

水 100 cc



+



+



+



●作り方と打ち始め

「カクシン」200 cc、「バラケマツハ」200 cc、「粒戦」25 ccをエサボウルに入れて軽く混ぜ合わせたところに水100 ccを注ぐ。ムラがないように大きく20回ほどかき混ぜ、しばらくおいてエサが締まってきたら基エサの完成。これを1/3に小分けして5回ほど押し練りをし、エアー抜いて使い始める。これでウキが沈没するぐらいエサが持てばOK。持たないようならさらに押し練りで調整する。

エサの大きさとハリ

実寸大



推奨ハリサイズ=7号

●タナを浅くする

タナの規定がない釣り場に限定されますが、タナを浅くすれば落下中のエサへのへら鮎のアタックが減ります。ウキが動きすぎる、カラツンやスレ、イトヅレが多いときはシンプルにタナを浅くしてみましょう。また、タナを浅くすることでエサも持たせやすくなりますので、しっかりナジませてからの釣りがしやすくなります。

●ハリスを詰める

ウキが動きすぎる、カラツンやスレ、イトヅレが多いときは下ハリスを詰めてみましょう。スタートは35cmですので5cm詰めて30cmにしてみましょう。それでも釣りにくい場合は、くわせエサを「力玉ハードⅡ」から大きさのある「力玉ハード(L)」に換えてみます。それでもウキが動きすぎて釣りにならないようなら魚の活性が高いと判断して「ヒゲトロ」セット、あるいは両ダンゴに釣り方を変更しましょう。

●上手く釣れないときは……

ウドンセットの浅ダナ釣りをしていてあまりウキが動かない、サワリやアタリが少ないときは、浅ダナの釣り自体がよくないと判断します。チョーチン釣りや底釣りなど、違う釣り方に変更しましょう。

「エサボウルケース PA-01」

フタ裏に装備した左右のサイドパネルにより、水しぶきや直射日光、風などの外的要因からエサを守り、タッチの変化を軽減できるエサボウルケース。開口部は、サイドパネルの取り付け位置を変えることで状況に応じた高さに調節でき、サイドパネル自体もコンパクトに折り畳むことができます。



ウドンセットの浅ダナ釣り

基本必須テクニック

くわせエサは「カ玉ハードⅡ」

ビン詰めタイプの粒状くわせエサ。エサ持ちがよくへら鮎に揉まれてもハリ抜けしにくいので、高活性時でも安心して使える。また、新発売の「カ玉ハード(L)」よりサイズが小さいので食い渋り時にも対応する。



●エサを調整する

作ったエサをそのまま使うのではなく、打ち始めから押し練りを加え、しっかりエサが持つ状態でスタートしてください。目安としては、ウキのトップ先端ギリギリまでナジむぐらいのエサ持ち加減です。次第に魚が寄ってきますと、徐々にエサ持ちが悪くなります。こういうときは、さらに押し練りを加えてエサが必ず持つように調整します。

押し練り

手の甲側を使ってエサを押しエア－を抜くのが“押し練り”。エア－を抜くことでエサがまとまりエサ持ちがよくなる。この“押し練り”を繰り返してエサが持つようにする。



エサを持たせて縦誘いで釣る

ウドンセットの チョーチン釣り

釣り方の基本

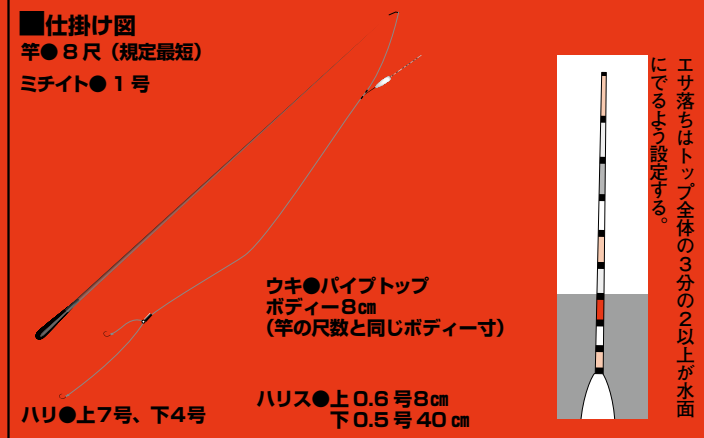
盛期とはいえ食いが渋り、両ダンゴや「ヒゲトロ」セットではアタリが少ない場面で活躍する釣り方です。基本的な釣り方は、浅ダナ釣りと同様でしっかりバラケエサをタナまで持たせ、そこから釣りを組み立てます。チョーチン釣りは決まったポイントに確実にエサを入れやすいことからへら鮒を厚く寄せることができます。

さらに最大のメリットともいえる、竿の操作でアタリをだせること。持ちすぎ（ウキが沈没する）ぐらいしっかりウキをナジませ、そこから竿先を持ち上げるように竿を上げて下ろす。いわゆる縦誘いを駆使できる点です。

この縦誘いは、バラケの促進、エサの落下を繰り返し演出でき、へら鮒へのアピールでアタリを誘発できます。そのためにもしっかりエサを持たせ、さらに縦誘いを数回繰り返せるほどのエサ付けを心がけてください。

タックルセッティング

仕掛けは基本的に強い方向でセッティングしてください。釣れないときに迷いを捨てるためにもセッティングは固定しましょう。



適度な重さとまとまりでタナに凝縮

●バラケブレンド

「カクシン」200 cc+
「ヤグラ」200 cc+
「粒戦」50 cc+
水 100 cc



+



+



+



●作り方と打ち始め

「カクシン」200 cc、「ヤグラ」200 cc、「粒戦」50 ccをエサボウルに入れて軽く混ぜ合わせたところに水100 ccを注ぐ。ムラがないように大きく20回ほどかき混ぜ、しばらくおいてエサが締まってきたら基エサの完成。これを1/3に小分けして10回ほど押し練りをし、エア抜いて使い始める。これでウキが沈没するぐらいエサが持てばOK。持たないようにさらに押し練りで調整する。

エサの大きさとハリ

実寸大



推奨ハリサイズ=7号

●エサを大きく付ける

狙いのタナまでエサが届かなければこの釣りは成立しません。ウキが沈没するぐらいしっかりとナジミ幅をだして釣ることを意識しましょう。もう少しエサを持たせたいと思ったら単純にエサを大きく付けてみましょう。ハリに残るエサ量が増えれば、それだけナジミ幅も多くなります。

●ハリスを詰める

ウキが動きすぎる、カラツンやスレ、イトヅレが多いときは下ハリスを詰めてみましょう。スタートは40cmですので5cm詰めて35cmにしてみましょう。それでも釣りにくい場合は、魚の活性が高いと判断して「ヒゲト口」セット、あるいは両ダンゴに釣り方を変更しましょう。

また、ナジむ途中の動きはあるのにナジんでからウキが静かになる、動きはあるけどアタリがでないなど、深いタナがよくないと判断できるときは、すぐに浅ダナ釣りに変更してみましょう。

●縦誘いを駆使する

エサをしっかりナジませてそのままじっと待っていれば釣れるかと言えば、そう簡単ではありません。年々難しくなるへら鮒釣りにおいて、チョーチン釣りでは縦誘いを駆使する釣り方が一般的になっています。

縦誘いを入れる効果は明確で、①しっかり持ったエサがタナ付近でバラけてへら鮒を厚く寄せる、②エサが動く、エサの落下を繰り返し演出できることでアピール力が増すとともにヒットチャンスも増える。

この①②の効果は竿の操作が行えるチョーチン釣りならではの強みです。強固な時合構築にもつながりますので、積極的に縦誘いを行なってみましょう。

●上手く釣れないときは……

ウドンセットのチョーチン釣りをしていてあまりウキが動かない、サワリやアタリが少ないときは、チョーチン釣り自体がよくないと判断します。浅ダナ釣りや底釣りなど、違う釣り方に変更しましょう。

ウドンセットのチョーチン釣り

基本必須テクニック

くわせエサは「カ玉ハード（L）」

ビンから取り出して、そのまま使える粒状くわせエサです。「カ玉ハード」シリーズで定評のある素材を使用し、一般的な絞り出しウドンに近いサイズに仕上げました。円柱の形状によりユラユラとアピールしながら落下するので、高活性時の宙釣りや冬の段差の底釣りの強い味方となります。また、へら鮎の活性に応じて「カ玉」シリーズとの使い分けや本品のさなぎ漬けなどお好みのアレンジもお楽しみいただけます。

実寸大



●エサを調整する

作ったエサをそのまま使うのではなく、打ち始めから押し練りを加え、しっかりエサが持つ状態でスタートしてください。目安としては、ウキのトップ先端ギリギリまでナジむぐらいのエサ持ち加減です。次第に魚が寄ってきますと、徐々にエサ持ちが悪くなります。こういうときは、さらに押し練りを加えてエサが必ず持つように調整します。

押し練り

手の甲側を使ってエサを押しエアーを抜くのが“押し練り”。エアーを抜くことでエサがまとまりエサ持ちがよくなる。この“押し練り”を繰り返してエサが持つようにする。



ナジミ幅のキープを意識しよう

両ダンゴの底釣り

釣り方の基本

底釣りは独特の動きが楽しめ、ある意味へら鮒釣りで一番面白い釣り方とも言えます。盛期の底釣りはしっかりエサをナジませていかないとウワズリを招いたり、ウキが動きすぎて釣りづらくなります。スタート時から3~4目盛りしっかりナジミ幅をだし、魚が寄ってきてからもこの3~4目盛りのナジミ幅をキープするようにします。

このナジミ幅をキープするには、エサ付け圧（強さ）の強弱、エサの大きさをコントロールします。あくまでセッティングは固定したまま、エサ付けで調整してください。

魚が少ない（ウキの動きが静か）ときは大きめで圧は弱め、魚が多い（ウキがよく動く）ときは小さめで圧は強くなど、1投ごとにウキの動きを見ながらのエサ付けを意識してください。一番はナジミ幅をキープすること。これだけは頭に入れておきましょう。

タックルセッティング

仕掛けは基本的に強い方向でセッティングしてください。竿の長さは竿一杯（チョーチン）で底が取れる長さを選びましょう。ウキは大きめで、釣れないときに迷いを捨てるためにもセッティングは固定しましょう。

■仕掛け図

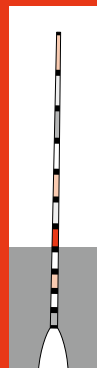
竿●8~12尺
(竿一杯で底が取れるように)

ミチイト●1号

ウキ●パイブトップ（竹足）
ポディー 10~14 cm
(竿の尺数プラス2cmのポディー寸)

ハリ●上下5号

ハリス●0.6号 32 cmと 40 cm



エサ落ちとはトップ全体の3分の2以上が水面にでるよう設定する。

エサ持ち抜群の単品使い

●エサブレンド

「ダンゴの底釣り芯華」100 cc+
水 50 cc



+



●作り方と打ち始め

「ダンゴの底釣り芯華」100 ccをエサボウルに入れ、そこに水100 ccを注ぐ。ムラがないように大きく20回ほどかき混ぜ、ボウルの隅に寄せるようにしてしばらく放置。エサが締まってきたら基エサの完成。これを1/3に小分けして10回ほど押し練りをし、エア抜いて使い始める。これで3~4目盛りのナジミ幅ができればOK。ナジミが少ないようならさらに押し練りで調整する。

エサの大きさとハリ

実寸大



推奨ハリサイズ=5号

●手水は慎重に……

エサをやわらかくしてエサを食いやすくする手水ですが、エサがやわらかくなることでエサ持ちが悪くなります。また、膨らみも早くなり水中ではエサが大きくなります。このように考えるとできるだけ硬いエサで釣っていくほうが釣りが壊れにくく安全です。どうしてもやわらかくしたい場面では「粘力」を加えたブレンドを使ってみましょう。

●エサブレンド

「ダンゴの底釣り芯華」100 cc+
「粘力」付属スプーン 1 杯+
水 50 cc



+



+



●上手く釣れないときは……

魚が高い位置にいてうまくナジませることができない、逆に魚がないのでエサがナジんだままウキが戻ってこないときなどは、底釣りが成立しない場合と諦めて他の釣り方に変更しましょう。

両ダンゴの底釣り

基本必須テクニック

●エサを調整する

作ったエサをそのまま使うのではなく、打ち始めから押し練りを加え、しっかりエサが持つ状態でスタートしてください。目安として、ウキのナジミ幅が3～4目盛りでるエサ持ちを心がけます。次第に魚が寄ってきますと、徐々にエサ持ちが悪くなりますが、そのときはさらに押し練りを加えて3～4目盛りのナジミ幅をキープするように調整します。

押し練り

手の甲側を使ってエサを押しエアーを抜くのが“押し練り”。エアーを抜くことでエサがまとまりエサ持ちがよくなる。この“押し練り”を繰り返してエサが持つようにする。

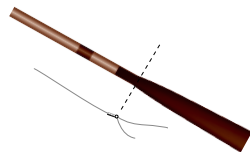


●スタートのタナ設定

エサが確実に底に着く状態で打ち始めるために、タナ取りで決めた上バリントンの位置から5cmズラした（深くした）タナから始めましょう。

●仕掛けの長さを決めておこう

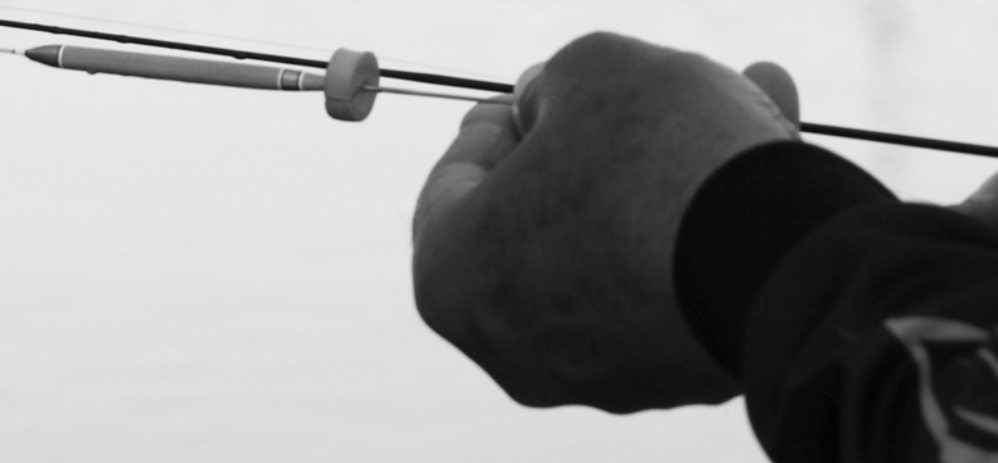
タナが生命線の底釣り。釣っている途中でタナがおかしくなることもあります。理由としては“底が掘れた”ことが多いですが、仕掛けのミチイトの伸び縮みが原因のこともあります。それを判断するためにも仕掛けの長さを把握しておきましょう。



たとえば、スイベルがくる位置を握り上部、竿との継ぎ目と決めておく。



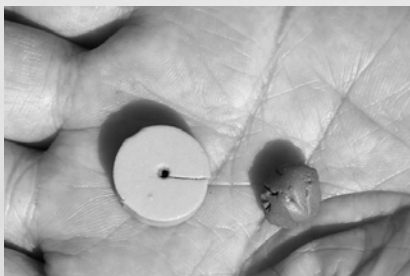
タナを取る際は、竿先を持ちあげて実際に釣る位置までタナ取りゴムを寄せて測る。



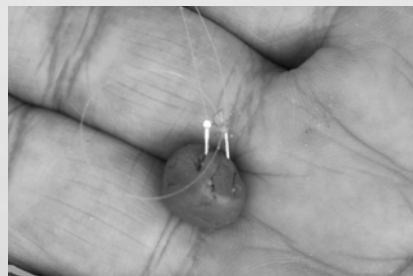
両ダンゴの底釣り

【実演】タナ取り方法

底釣りはタナ取り（水深を測ること）がすべてといわれるほどタナは重要です。釣りを始める基準であり、地形変化や底の状態の変化（釣っている途中でヘドロやゴミが取り除かれて水深が変わること＝底が掘れた）を知るための唯一の手段です。このタナ取りをおろそかにしては底釣りは釣れません。動画でわかりやすく解説しているのでチェックしましょう。



フロートを使用すると素早く正確にタナが測れる。



粘土オモリに上下2本のハリを刺してタナを取る。

へらエサブレンド 計算ツール

活用してみよう！



へらエサブレンド
計算ツールはこちら→

ダンゴエサにしるバラケエサにしる、その種類は数多くあります。それぞれに特徴があり、必要性があるからこそこれだけの数のエサが用意されています。しかし、すべてのエサの特徴を把握し、その日、その場で最適なエサを選択するのは至難のワザです。名手と呼ばれる人達でもそれは無理でしょう。

では思いつくままに好きなエサをブレンドしたところで上手く釣れる保証はありません。何かしらの根拠に基づいてエサをブレンドしているのです。その根拠は名手であれば経験や感覚的なことも含まれます。それでは不親切と思うかもしれません。

そんなときに役立つのがパソコンやスマホで利用できる「へらエサブレンド計算ツール」です。使い方は簡単で、エサの品名を選択して分量を打ち込むだけで計算してくれます。

計算できるエサは、麩エサだけでなくグルテンやマッシュにも対応しており、表示される水量は硬め、標準、やわらかめとあるので好みの仕上がりで作ることも可能です。また、エサ持ち、重さ、粒子のレーダーチャートも同時に見ることができるので、作ったブレンドの特性がひと目で分かる優れものです。

たとえば、今回紹介している両ダンゴのブレンドの浅ダナとチョーチンの違いをみてみましょう。ブレンドでは、「浅ダナー本」と「コウテン」が「バラケマッハ」と「ダンゴの底釣り夏」に変更されています。これを「へらエサブレンド計算ツール」のチャートで比較すると、エサ持ちが72から73とほんの少しアップしています。そして重さが27から36となり明らかにエサが重くなったことが分かります。粒子は40で同じ。つまり、浅ダナのブレンドに重さが追加され、それでタナまで持たせられるブレンドになっていることが理解できるでしょう。

このように、ブレンドを数値化できることでより理解を深めることができるのです。ぜひ、便利な「へらエサブレンド計算ツール」を活用してください。

●浅ダナ両ダンゴのエサブレンド

「カクシン」500 cc+「浅ダナー本」100 cc+「コウテン」100 cc+水 200 cc

ブレンド計算結果

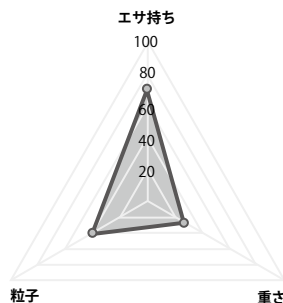
カクシン+浅ダナー本+コウテン配合のエサ

カクシン	500cc
浅ダナー本	100cc
コウテン	100cc

エサ持ち 72
重さ 27
粒子 40

エサの量	水分量		
	硬め(90%)	標準(100%)	やわらかめ(120%)
700cc	164 cc	182 cc	219 cc

エサ持ち	重さ	粒子
★★★★★	★★★★★	★★★★★



●チョーチン両ダンゴのエサブレンド

「カクシン」500 cc+「バラケマツハ」100 cc+「ダンゴの底釣り夏」100 cc+水 200 cc

ブレンド計算結果

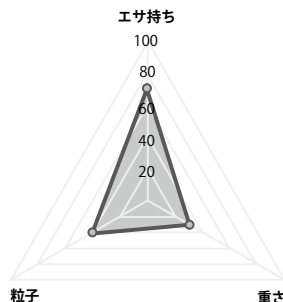
カクシン+バラケマツハ+ダンゴの底釣り夏配合のエサ

カクシン	500cc
バラケマツハ	100cc
ダンゴの底釣り夏	100cc

エサ持ち 73
重さ 36
粒子 40

エサの量	水分量		
	硬め(90%)	標準(100%)	やわらかめ(120%)
700cc	178 cc	198 cc	237 cc

エサ持ち	重さ	粒子
★★★★★	★★★★★	★★★★★



下バりに、 新たな選択肢。

ビンから取り出して、

そのまま使える粒状くわせエサ「カ玉」に

新たなバリエーションが登場。

「カ玉ハード」シリーズで定評のある素材を使用し、

一般的な絞り出しうどんに近いサイズ、形状に仕上げました。

ターゲットの活性に応じた

くわせエサの使い分けのひとつとして、

ぜひご用意ください。

●カ玉ハード(L) 35g

新発売



原寸大

